

余りにも無謀な六ヶ所再処理工場・廃液の海洋放出

海洋放出を阻止することで再処理そのものを止めよう

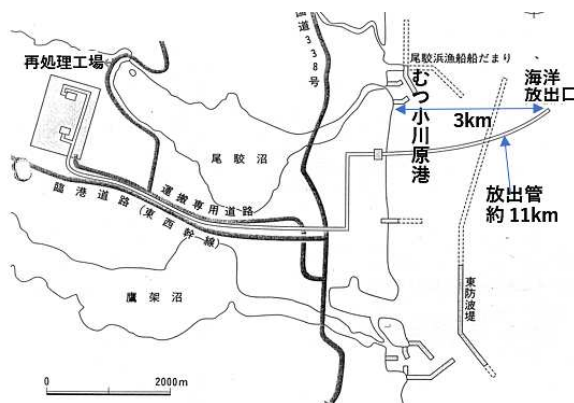
いま福島第一原発の処理水の海洋放出が大きな問題になっている。その実情に照らして、六ヶ所再処理工場からの低レベル廃液の海洋放出に改めて目を向けると、次の2点から、再処理工場の運転自体が到底許されないものであることが明らかとなる。

- ① 2007年10月のアクティブ試験での海洋放出実績では、10回放出のトリチウム平均濃度は9,000万Bq/Lで、福島で想定されている濃度規制値1,500Bq/Lの6万倍であった。再処理工場では海洋放出の濃度規制が取り払われているためである。
- ② 予定通り再処理が行われれば、毎年9,700兆Bqのトリチウムが放出されるが、これはいま福島に貯蔵されている780兆Bq(2021.4)の12.4倍にも相当する。

このような無謀が許されていいのだろうか。再処理自体が許されないことを如実に示している。

◆六ヶ所再処理工場からの低レベル廃液の海洋放出

六ヶ所再処理工場内には容量600m³の貯蔵プールが4基あり、1基が満杯になると6時間かけて海洋へ放出する。放出口は右図のように、むつ小川原港の沖合3kmの水深約50mの海底にある。放出された廃液は基本的に南方に流れていくが、その途中でサーフィン会場などもある。



実物の使用済燃料の再処理を行ったアクティブ試験では、2007年10月に10回の海洋放出が行われ、その結果は右表のようになった。廃液の1回排出(放出)量はほぼプール容量の600m³であり、10回合計のトリチウム放出量は520兆Bqなので、2021年4月福島貯蔵量780兆Bqの67%に相当する。問題は放出濃度であり10回平均で9千万Bq/Lとなっている。これは国の濃度規制値6万Bq/Lの1,500倍、福島で現に採られている濃度限度1,500Bq/Lの6万倍に相当する。

アクティブ試験での排出実績(2007年10月)

排出日	排出量 (m ³)	トリチウム (兆Bq)	濃度 (億Bq/L)
10月 2日	584.8	99	1.69
4日	585.3	85	1.45
6日	586.4	83	1.42
11日	583.6	70	1.20
13日	586.2	50	0.85
17日	575.1	0.0024	0.0042
18日	586.7	52	0.89
19日	543.4	52	0.96
27日	581.5	19	0.33
31日	585.5	13	0.22
平均	579.9	52	0.90

このような高い濃度になるのは、再処理工場からの海洋放出に関しては濃度限度が取り払われてしまっている結果である。もし福島並みの濃度限度を守れば、1回の放出が現行では6時間で済むところ6万倍の41年間もかかってしまう。本格運転になると年に9,700兆Bqのトリチウムが貯まるが、福島に現存する量780兆Bqの12.4倍に相当する。1回52兆Bq放出する場合、2日に1回程度放出しなければならない。規制値があると再処理工場は廃液だらけになってしまい、再処理自体が成り立たない。だからこそ濃度規制を取り払っているのである。

今年1月20日付東奥日報によれば青森県漁連は海洋放出は「容認できない」との意向である。福島の高濃度で、年に12倍ものトリチウムを放出する六ヶ所の海洋放出は到底認められるはずがない。改めて事実に基づいて海洋放出反対の声を広げ、まずは福島の高濃度放出を阻止し、六ヶ所の海洋放出を阻止することによって再処理そのものを止めよう。